

武藏あぶみ

土田龍太郎

伊勢物語の昔男かならず在原業平朝臣なりとは定むまじけれども、かの物語にこゝら載れる歌おほかたは在五中將の詠み出でしものといはむも誤りなきにたり。

天の下の色好みの名に立てるこの中將、寛平延喜よりなほ上つ方の人なれば、その歌げにすなほに古めかしきままになにとやらむ神さびて聞ゆることさへあり、さまで巧まず一いきに言ひ出せりとおぼゆるもの多けれど、かたへはまた言葉のはてになほにほひ残りてなごりつきせず、いみじくなつかしきものところどころに見ゆるは、中將に生れつきたる歌の才の世に及びなきがゆゑなりとこそ言ひつべけれ。

西の京に住める女、心ばへのよそ人にまさりてや見えにけむ、男うち物語らひてまたの日、

おきもせずねもせで夜をあかしては春のものとてながめくらしつ

と詠みやりけるは、彌生の初つ方、雨のそほふる頃なりけり。男なにゆゑにおきぬ定まらざりしや、草子地いと言少ななればしかと知られねど、とかく亂れてやるかたなき思ひをおぼめかしきままに詠み出せるこの一首、おぼろなる春の日の雨がちにてものうげなるけはひさへおのづからこもりたれば、ただうち見るには、さまで巧ありともおぼえねども、まことはいと巧めりと言ふをうべし。

おきもせずねもせでとは、はしたなきままに中空なるさまを言へれど、にもあらずかくにもあらず、かくはあらずさりとてかくあらざるにもあらずてふ一つ方に定まらぬ言ひさま、同じ物語の内を尋ぬるになほこかしこに見ゆれば、そを左に一わたり列ねまほしくほりするなり。

男あるつれなかりける女に

言へばえに言はねばむねにさわがれて心ひとつになげくころかな

とばかり詠みつかはしたり。この歌の主、言はむとすれどもえ言はぬいぶせき胸の思ひの一つ方に静まらぬさまを述べてあはれなることなめならず。

また業平朝臣とおぼしき中將、右近の馬場のほとりに立てる女車の下簾より人の顔のほの見えしとき詠みやりたる

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなく今日やながめ暮さむ

といへる一首、おぼめかしきままにあかみやみぬべきはかなき戀のおもむきを述べていと巧めりと言ふをうべし。この簾の中にゐける人、中將にちなみ淺からざりしかの二條后にてもやありけむかし。

藤原敏行のよばひわたれる女けしうはあらねどいまだ若くて文もえ書かねば、同じ中將とおぼしきなまあて人その女に代りて

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る雨はふりぞまされる

と詠める歌また拙からず。思ひ思はずと言へるは、敏行のわれを思ふやいなや知らまほしてふ女的心を業平のただおしはかりて述べたるばかりなれども、女男のあはひのうしろめたく心細きさまこのわづか七文字の内によくこもれりと言ふをうべし。

とにもあらずかくにもあらず一方に定めがたきことのおさまを述ぶるは、昔男に限れりしにもあらず。この男ものの言ひ交せしをみなの中にもかくおぼつかなきさまに歌詠みなせる人のありしことかの物語の内に見えたり。

男の東の方にゆきて後、昔都にてあひなれし女と交はせる武藏あぶみの歌、たへなることよなければ好みめづる人昔より少からず。はじめ男より、聞ゆればはづかし聞えねば苦しと言ひてやりし消息のおもてにまた武藏あぶみと書きければ、女の返りごとに

武藏あぶみさすがにかけたたのむには問はねばつらし問ふもうるさし

と詠めるいらへ歌、男の問ごとくにいとよくなへり。昔のことさまでなごりをしきにもあらねど、なごりはたたえてなきにしもあらず、さすがに忘れかねつるわりなき戀のはかなさをたださりげなきままに詠み出せるこの歌のすがたのためでたきことたとしへなし。男この歌をえていとどたへがたくなりて

問へば言ふ問はねば恨む武藏あぶみかかるをりにや人は死ぬらむ

と詠みてやりたりとぞ。

昔男と思ひかはせし齋の宮、かの物語に記せるごとく田村の帝の御娘にて惟高親王の御妹なりとせば、恬子内親王を指せりと思はではあるべからず。この内親王と業平朝臣のあはひまことはいかがなりけむ、草子地に述ぶるみそかなるあふせのうつつにありたるやいなや、ただおしはからむにもたよりとてなければ、この仲らひなほざりならでかたみに戀うてやまざるひたふる心の世にたくひなかりしことまた疑ふべきにあらず。この戀のおもむきにつきて説かまほしきことさまさまあれどえ説きおほすまじくて、言長くあげつらはむもなかないたづらなるべければ、そはせでもありなまし。今はただ内親王と中將の歌のいみじきことばかり述べてとぢめむにはしかじ。

業平朝臣とおぼしき男、伊勢の國に狩の使ひにいきけるとき、夜さり人しづまりて齋の宮ひそかに男のもと來たれどつひになにごともあひ語らずしてかへりにけり。男いといふかしままにい寝もやらでゐたるに、明けての後齋の宮より男のもとに

君やこしわれや行きけむおもほえず夢かうつつかねてかさめてか

といへる歌ばかりなむ詠みおこせたる。この歌あかず別れにしおぼる月夜のおふせの夢ともうつつとも定めがたきおぼろげなるさまをきながら述べたれど、やるかたもなき心の言葉のほかになほはつかにほへれば、よせいめでたきことかぎりなし。今の世にも人のほめてやまざるこの一首、げに伊勢物語をすぶるかなめなりと言はむも言ひすぎたるまじとこそおぼゆれ。

書不盡言、言不盡意とはこと古りにたれど、おのが心とそを述ぶる言と必ずしも同じかるまじきはさることにて、世のいとなみのまめなる方につきて見るだにも、心と言葉とうち合ふことまことはいとまれなるべし。いはむやはかなき戀に惑へる女男の心、わがものながらわがものならぬやうにおぼえて、しかと言に定むることのたやすからざるはげにことわりとぞ言ひつべき。かかる心を詠める歌に、これにもあらずかれにもあらず、かくもあらずかくあらざるにもあらずてふ言ひさまのおのづからに出でくるはげに怪むにたらず。かく一方に定まらぬ戀を詠める伊勢物語の歌、右に七首ばかり引きたり。この歌どもの中に業平朝臣とおぼしき男の詠めりしもの三首あまり見ゆるは、かの朝臣の歌のふり、あたかも貫之の古今假名序に言へることく、心あまりて言葉たらざるがゆゑにてもあるらむかし。

(平成三十年四月十五日受附)